創られた芭蕉の終焉

――『芭蕉翁反古文』（通称『花屋日記』）――

松谷久美子

序

偽書なりと人こそ言はめ、
俳聖の臨終のさま
しめやかに語り聞かすに
つまされて花屋日記よむ。

（『冬の意志』より）

（一）

『芭蕉翁反古文』は、肥後八代正教寺の僧文暁の編集した芭蕉終焉記である。文化八年に開版され、天保の復刻本に『花屋日記』と題されて世に流布した。久しく芭蕉終焉の記録と信じられてきたが、その内容の随所に不用意な矛盾や誤りが発見され、今では文暁の偽書と断じられている。しかし、支考の『笈日記』・其角の『枯尾花』（内題、芭蕉終焉記）・路通の『芭蕉翁行状記』等、信憑性の高い実記を参考資料に用いた跡があり、一概に偽書として葬り去られないものを宿している。実証主義の学界ではさして問題にされないような一書であるが、文章は、芭蕉終焉の有様を述べて、しめやかな哀感を感じさせる魅力を持っており、その方面からも捨てがたいものと言ってよい。

（二）

近代に至って、正岡子規がこれを読んで感動の涙を流し、芥川龍之介はこれを土台に、近代的感覚を駆使して、短篇小説『枯野抄』を書いた。このような観点からしても、偽書の烙印を押された『花屋日記』の文芸的価値には掬すべきもののあることを認めぬわけにはいかない。もとより文暁は始めから創作として執筆したものではなく、実録としての体裁を整えるために力の及ぶかぎりの資料の収集を行なっている。芭蕉の直弟子たちによって書かれた芭蕉終焉記と見せかけるために、版行に際しては「芭蕉翁終焉実記序」（傍点筆者）を書き、校合者として浪速の花屋菴奇淵を置き、芭蕉直門の書いた

ものから材料を収集し、それらを念入りに綴り合わせることによって、あくまで実記であるという体裁を整えようとしている。本書の「芭蕉翁終焉実記序」は次のごとく記す。

今は一むかし、此花舎某が後庁（裏座敷の意）は、芭蕉終焉の地なり、時うつりぬれば、木はたちのびて空を支ふ。星うつりぬれば、石は沈みて人しらずなり行ぬ。元亨釈書に曰、「人去テ境留マル者也」と。（中略）花屋の後庁、芭蕉翁の終焉の実記を見て、涕すゝり泪を拭はざる輩は、世に月花をしらぬ人なり。かかる旧蹟有て、此旧記のあきらかに伝りあること、げに風雅の冥合といはむ。是ひとへに去来先生の篤実にして、翁生涯の事実を書記しおかれしゆゑなりとぞ。かく旧き事はしたはしうこそはべれ。云々。

この序文には、これから傑出した詩人の最期を描こうという文暁の意気ごみが汲みとられる。それと共に自ら筆を執って芭蕉像を描くことに全身の喜びを嚙みしめている有様も窺える。ところが文中に「是ひとへに去来先生の篤実にして、云々」とあるは、去来に仮託して手記にまことしやかな箔をつけようとすと意図に出ていることは明らかである。かかる作意は、芭蕉の「旅に病て夢は枯野をかけ廻る」を掲げ、句後の文章を「去来記」としていることと付合する。「去来記」とあるが、実は支考の『笈日記』の文章を土台においたもので、明らかに文暁の作意に出たことである。文暁は、文人肌の僧で、すこぶるイマジネートなところがあり、実録と見せかけながら、筆はいつのまにか創作的な世界へと入りこんでいくのである。僧文暁のヴィジョンとしてある芭蕉は高僧のごとき芭蕉像である。因に、かれは『凡非日記』や『次郎兵衛物語』のごとき問題の稿本も造り上げているのである。

（三）

『花屋日記』の九月廿九日から十月四日までの記述を支考の『笈日記』との比較において考察してみよう。

○廿九日

此夜より泄痢のいたはりありて、神無月一日の朝にいたる。しかるを此叟は、よのつね腹の心地悪シかりければ、是もそのまゝにやみなんと思ひけるに、二日三日の頃よりやゝつのりて、終に此愁とはなしける也。（傍点筆者）されば病中の間は、晋子が終焉記にくはしければ、たゞよのつねの上、わづかにかきもらしぬる事を、支考が見聞には記し傍る。（『笈日記』）

○廿九日。芝柏亭に一集すべき約諾なりしが、数日打続て、重食し給しゆゑか、労りありて出席なし。発句おくらる。

秋ふかき隣はなにをする人ぞ　翁

此夜より翁腹痛の気味にて泄瀉四五行なり。尋常の瀉ならんとおもひて、薬店の胃苓湯を服したまひけれど験なく、晦日朔日二日と押移りしが、次第に度数重りて、終に愁かゝるとはなりにけり。（傍点筆者）（『花日記』）

『此日記』には「終に此愁とはなしける也」とあり、『花屋日記』には「終に愁かゝるとはなりにけり」とある。小宮豊隆はこの部分を比較して、「支考は此所で、この言葉で、芭蕉が死んでしまった事をさして、それを痛惜し、初めにもう少し気をつけていたら、こんな事にはならずに済んだのではないかと、自責とも、他責とも、後悔とも、愚痴とも、何ともつかない深い心持を、極めて簡潔に表

現しているが、『花屋日記』では、芭蕉が既に死んでしまったことを悲嘆するのか、あるいは少なくとも、芭蕉が死病にとりつかれたことを痛惜する劇しいパッションの響きが籠っているに過ぎないのか、どのような気持でこれをそのまま借用したのかはわからないが、たぶん文暁は軽い意味の、心配な事になった、困った事になった位の意味にしかとらず、不用意に借用し、平気で不思議に微妙なアラクロニズムを醸し出している。」と評言している。『花屋日記』はまた、芭蕉の遺体を近江義仲寺に埋葬のとき導師をつとめた直愚上人を眞愚上人と二度も誤記している。確かに文暁の文章には随所に不用意な記述や矛盾や誤記がある。しかし、『花屋日記』には単に偽書として済まされない、何ものかが実存していると思われる。文暁は、芭蕉の門人たちの世界に自ら入ってゆき、その中の一人として生きたかったので、その手段として門人たちの手記の援用を乞うたのである。不用意な記述や矛盾や誤記があっても、それらのことは肚におさめた上で、文暁の芭蕉を読みとればよいわけである。

(四)

次に、芭蕉の臨終を描いた『笈日記』と『花屋日記』の記述を引き比べてみることにする。

されば此叟のやみつき申されしより飲食は明暮をたがへ給はぬに、きのふ十一日の朝より今宵にかけてかきたえぬれば、名残も此日かぎりならんと、人〳〵は次の間(居並)にいなみて、なにとわきまへたる事も侍らず也。午の時ばかりに、目のさめたるやうに見渡し給へるを、心得て粥の事す〻めければ、たすけおこされて、唇をぬらし給へり。その日は小春の空の立帰りてあたゝかなれば、障子に蠅のあつまりいけるをにくみて、鳥もちを竹にぬりてかりありくに、上手と下手のあるを見て、おかしがり申されしが、その後はたゞ何事もいはずなりて、臨終申されけるに、誰も〳〵茫然として終の別とは今だに思はぬ也。(『笈日記』)

次郎兵衛、素湯にて口を潤しまゐらせけり。や〻有て去来にむかひたまひ、先頃実永阿闍梨より路通が事を仰有。其后汝が丈草・乙州等に送りし消息、露霜とは聞捨ず。併少しいみはゞかること有て、雲井の余所にはなし侍りぬ。彼が数年の薪水の労、わすれおかず、我なき跡にはおよそに見捨たまはず、風流交り給へ。此事たのみ置はべる。諸国にもつたへ給はれかしと、言終りたまひて余言なし。合掌たゞしく観音経ときこえて、かすかに聞え、息のかよひも遠くなり、申の刻過て、埋火のあたたまりのさむるごとく、次郎兵衛が抱きまゐらせたるによりかゝりて寝入給ひぬとおもふ程に、正念にして終に属纊につき給ひけり。時に元禄七甲戌十月十二日申の中刻、御年五十一歳なり。(『花屋日記』)

上掲の支考の文章は『笈日記』の綴る芭蕉終焉記の中でも最も生彩のある一節である。芭蕉の臨終を述べて、「誰も誰も茫然として終の別とは今だに思はぬ也」とあるは、まさにその通りであったろうと推測される。一方、『花屋日記』は、乞食路通に対する芭蕉の慈愛と次郎兵衛のことを中心に記している。路通のことは大体『芭蕉行状記』に依ったものであるが、「や〻有て去来にむかひたまひ」は例の文暁の創作である。次郎兵衛のことは其角の『枯尾花』の芭蕉終焉記に「寿貞が子」と見え、芭蕉の臨終に侍ったことは事実で

あるが、「次郎兵衛が抱きまゐらせたるによりかゝりて」とあるは、これまた文暁の感傷に出た創作と思われる。しかし、芭蕉の臨終を描いて、「埋火のあたたまりのさむるがごとく」の描写は、さすがに文暁の文才を偲ばせ、『花屋日記』の記述をしめやかな魅力のあるものとしている。芥川は、このことばを『枯野抄』にそのまま引用した。

(五)

『花屋日記』の素材のすべてが芭蕉の門人たちの実記に依存しているとしても、これらの筆者の文体はそれぞれに異なっている以上、文暁は自己の文体でもって自分自身の芭蕉像を描いたのであった。芭蕉の門人たちからの実録の援用には杜撰な個所や、支考を去来におき替える等、作為の跡が目立つ。しかもなお『花屋日記』は、偽書として葬り去られない、真実なものが一筋流れている。わたくしは、この書物を読んで、文暁の語り得た芭蕉終焉の世界を興味ぶかく垣間見た心持がする。

〈注〉

(1) 『芭蕉翁反古文』日本俳書大系　俳諧系譜逸話集所収。
(2) 『花屋日記』岩波文庫。
(3) 『笈日記』日本俳書大系　蕉門俳諧後集所収。
(4) 『枯尾花』日本名著全集　芭蕉集付録所収。
(5) 『芭蕉翁行状記』日本名著全集芭蕉集所収。